

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel: 0595-63-1725
Email: jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会
発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：60部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：20部

ニホンイノシシ

人間にとって住みやすい場所は、イノシシを始め、多くの野生動物にとっても、住みやすいに違いありません。野生動物は山で生活するのが本来の姿だといふ私たちの概念を改める必要があります。今後、人間の活動が低下すると、昼間に畑へ出没するイノシシが増えるかも…。

農作物を作ること自体が必然的に動物を誘引して、農業が野生動物の行動に大きな影響を与えたことは事実です。

イノシシは縄文時代早期から存在している、古来より私たち人間はイノシシから作物を守るために、多大な労力と時間を割いてきた歴史があります。

食糧事情が豊かな現代と違って、昔はイノシシの農作物被害が人の「生死」にかかわる大問題で、村人たちは寝ずの番や、柵を築き犬達もイノシシを追い払うために活躍。それ

ほど、イノシシの被害は深刻だったのです。イノシシは夜行性といわれていますが、本来は昼行性で、周りの環境や状況に応じて、柔軟にその活動パターンを変える習性を潜めていて、人間を警戒する必要のないところでは、昼間に活動します。人間の活動や環境により柔軟に昼・夜を使い分けています。

イノシシは基本的に単独で行動し群れをつくらない社会構成です。集団生活をしているサルやシカに比べて、大量捕獲は難しいです。交尾期は12月～1月。イノシシは成長が速く、野生では多くの雌が2歳で初産。その後、毎年春に2～8頭の子どもを産みます。

多くの大型野生動物が普通1回に1子しか産まないことを考えると、増加率は極めて大きい。野生のイノシシの平均寿命は、10年程です。正式名称はニホンイノシシ。一般的にイノシシと呼ばれる西日本に生息しています。他に、沖縄

地方にしか生息していないリュウキュウイノシシがいます。ニホンイノシシと比べると小柄で絶滅危惧種のレッドリストに記載されています。

日本に生息するイノシシはこの2種類です。北海道には現在、家畜化されているイノブタを除き野生のイノシシは存在していません。イノシシは見かけによらずとも運動神経の良い動物で、走る速度は約50kmと車並み、跳躍力は成獣になると110cmの柵を助走なしで超えられる程あり、鼻での押し上げる力も非常に強く60kg位であれば簡単に押し退けることが出来ます。更にイノシシは嗅覚が優れています。食性はドングリや木の実、タケノコなどの植物性の物を好んで食べますが、動物性のネズミやミミズ、人間の捨てた生ゴミも漁るなど雑食性です。農作物でよく狙われるのは山芋や根茎類、

『ごんべ』が種まきやカラスがほじくる

豆類、もち米、果実類が特に注意が必要です。イノシシは食物があつて、身を隠せる繁みの多い環境を好みます。高齢化や過疎化による耕作放棄地はイノシシにとって絶好の棲家となっています。

いまや、中山間地域は、野生動物の被害がおきて当然の環境になっています。

知らないうちに、イノシシの好む環境を与えていますか？

イノシシ対策の基本は近寄りた環境づくりです。

春野菜の植え付け季節で、鳥害が心配されています。鳥害対策として、色々とツールを使って畑から鳥を追いかけるイメージですが、鳥は賢く単なる

鳥類は見かけによらず賢く学習能力も高く手強い相手です。こうした手強さが鳥害防除が難しい理由の一つになっています。

防鳥網で作物を覆うのは、最も確実な被害防止策であり、家庭菜園や果樹栽培では基本対策といえます。

しかし、設置や撤収の手間がかかること、作業の邪魔になるなどの問題があり、材質や設置方法によってはコストもかなり高いなどデメリットがあります。

★防鳥網で作物を覆う
防除対象となる鳥の種類に合わせて網目の大きさを選ぶこと、すき間を作らないこと、網を作物から十分に離し、たるませないことが大切です。網目サイズは細かいほど小さい鳥にも入られませんが、風雪の影響を受けやすくなります。スズメには20mm目、ヒヨドリや

ムクドリには30mm目、カラスには75mm目の網が必要です。

★物理的飛来妨害（テグス、ひも）
カラスの場合、テグスを1m以下の間隔で張り巡らすとある程度効果があつて、ヒヨドリなど体が小さい、ホバリングができるなど飛行の巧みな鳥では、テグスで侵入を妨害するのは難しい。

★防鳥テープ
あまり効果は期待できないうえ、安価で気楽に使用できます。

★吹き流し
夜行性のヒヨドリガモによる麦への食害対策に有効だったという報告があります。

★ディスプレイスコール
鳥の悲鳴のことで、遭難声ともいいます。ねぐらからの追い払いには有効だが、農地ではすぐに慣れることが多いようです。

★目玉模様
目玉を拡大、誇張した風船などが用いられているが、すぐに慣れを生じます。そもそも鳥が目玉にだまされて驚くのかどうかにも疑問があります。

★マネキン、かかし
人に似ているほど効果が高いが、やはり慣れを生じる。動作を加えると効果が高まる。こまめに場所や向きを変え、変えることも大事。キジバトに比較的有效。

★鳥の死体
カラスなどの鳥の死体をぶらさげるもので、昔から各地で行われていました。鳥が仲間の死体を見て危険を察知するかどうかは不明。効果があつるといふ人も多いが、やはり慣れを生じます。

★地域単位の防除対策
一斉播種や一斉植え付けが考えられるが、現在の農業形態では難しい課題が多い。

結論的には、鳥の慣れを打破する追い払い法は現状では見当たりにませんし、近い将来開発される見込みも少ないでしょう。

どんな防鳥機器にも鳥は慣れてしまいますが、何もやらないよりは被害が減りますが、大事なことは、コストに見合うかどうかです。

斑点米の発生原

稲の害虫には、バッタの仲間のイナゴ、ガの仲間のニカメイガ、カメムシの仲間のウンカやヨコバイ、カメムシなどがいますが、その中でも、斑点米を発生させるカメムシが、いま稲作農家を最も悩ませています。

出荷米の中に、この斑点米がちょっとでも混じっていると、米検査で等級が下げられ、

農家の収入が減ってしまいます。

※着色粒が1000粒に2粒以上入っているば1等米から2等米に落ちてしまいます。

カメムシの発生源は畦畔のイネ科雑草です。被害軽減のために常日頃から、畦畔の草刈りを行いカメムシ類の生息密度を下げることに有効です。

ただしイネの出穂時期に下手に草刈りをする、行き場を失ったカメムシが水田に直行ということにもなりかねないので、出穂期の草刈りは避けた方がよいでしょう。

雑草地からほ場への害虫の侵入防止に配慮した、適期・適切な草刈りを実施。出穂2週間前頃に地域ぐるみで一斉に草刈りを行い、刈り取った草は、畦畔から搬出します。

休耕田の草刈りや耕起を行い除草対策を徹底することも必要です。

薬剤散布は、穂揃期に成虫が多い時に散布します。また、穂揃期の10日後に幼虫が多い時も再度薬剤散布を行います。

江戸時代には、タバコのような天然の殺虫成分を含んだ草を煮た汁をまいたりもしています。

害虫が越冬しないように、雑草を焼く方法なども行われました。

害虫対策として、現在冬期に水田に水を入れたままにする方法「冬季湛水」農法が見直されています。

カメムシは出穂後に水田に侵入し、稲に口針を刺して吸汁します。糊熟期に吸汁された稲は部分着色米（斑点米）、乳熟期の加害では、「しいな」粒（稔実不良の粒のこと）の発生が多くなります。

カメムシは稲作農家の天敵です。

近頃イナゴが急増しています。イナゴはイネの害虫として、農業により一時激減したものの、近年は食の安全を考える中で、農業などによる散布駆除が少なくなってきたことから、以前に比べ個体数は回復しているようです。一匹あたりの食害量は少ないが卵は主に雑草の多い農道や畦畔の地際部に産まれるが、イネの株内にも産む。大きくなるにつれて上位の葉に移行し食害量も多くなり未熟粒と死米が増加し整粒歩合が低下します。

カメムシ・イナゴなどには、時期に合わせて畦畔の除草が有効です。

カメムシ対策

斑点米の発生原

稲の害虫には、バッタの仲間のイナゴ、ガの仲間のニカメイガ、カメムシの仲間のウンカやヨコバイ、カメムシなどがいますが、その中でも、斑点米を発生させるカメムシが、いま稲作農家を最も悩ませています。

出荷米の中に、この斑点米がちょっとでも混じっていると、米検査で等級が下げられ、

農家の収入が減ってしまいます。

※着色粒が1000粒に2粒以上入っているば1等米から2等米に落ちてしまいます。

カメムシの発生源は畦畔のイネ科雑草です。被害軽減のために常日頃から、畦畔の草刈りを行いカメムシ類の生息密度を下げることに有効です。

ただしイネの出穂時期に下手に草刈りをする、行き場を失ったカメムシが水田に直行ということにもなりかねないので、出穂期の草刈りは避けた方がよいでしょう。

雑草地からほ場への害虫の侵入防止に配慮した、適期・適切な草刈りを実施。出穂2週間前頃に地域ぐるみで一斉に草刈りを行い、刈り取った草は、畦畔から搬出します。

休耕田の草刈りや耕起を行い除草対策を徹底することも必要です。

薬剤散布は、穂揃期に成虫が多い時に散布します。また、穂揃期の10日後に幼虫が多い時も再度薬剤散布を行います。

江戸時代には、タバコのような天然の殺虫成分を含んだ草を煮た汁をまいたりもしています。

害虫が越冬しないように、雑草を焼く方法なども行われました。

害虫対策として、現在冬期に水田に水を入れたままにする方法「冬季湛水」農法が見直されています。

カメムシは出穂後に水田に侵入し、稲に口針を刺して吸汁します。糊熟期に吸汁された稲は部分着色米（斑点米）、乳熟期の加害では、「しいな」粒（稔実不良の粒のこと）の発生が多くなります。

カメムシは稲作農家の天敵です。

近頃イナゴが急増しています。イナゴはイネの害虫として、農業により一時激減したものの、近年は食の安全を考える中で、農業などによる散布駆除が少なくなってきたことから、以前に比べ個体数は回復しているようです。一匹あたりの食害量は少ないが卵は主に雑草の多い農道や畦畔の地際部に産まれるが、イネの株内にも産む。大きくなるにつれて上位の葉に移行し食害量も多くなり未熟粒と死米が増加し整粒歩合が低下します。

カメムシ・イナゴなどには、時期に合わせて畦畔の除草が有効です。

チャット一服



つと漬物が数枚程度だと知りさらに驚愕。そこで「よし、力を出すには肉だろ」と思い、その飛脚に試しに肉を食わせて

ひ弱になった現代人

現代、子供の体力低下など体力が問題視されている。昔の日本人は、質素な食事なのに現代人より体力があった。食が「欧米化」する前までの日本は、短命であったが、スタミナと体力はずば抜けたものがあつた。1俵60kgの米俵を5俵も背負う女性はそう珍しくもなかったという。

江戸時代、通信手段として飛脚があつた。当時の飛脚たちの中で、さらに走るのが達者な者を「早道」と言つた。宮本武蔵の五輪書には「早道」は1日で40~50里(160~200km)ほども走るとある。東京一大阪間(約600km)を最短3日で書面を届けていたという。

小泉八雲も、その飛脚たちの体力に驚愕し「どんな物を食つてるんだ」と見せてもらつたら、握り飯が2

と走り、胃もたれして全く走れなかつたという。小泉八雲は「日本人の食事は完成されている」と悟つたという記述がある。

握り飯120g(1個)=215kcal
中位の沢庵2切れ=10kcal。
現代人の一日の消費カロリー=体重(kg)×30=?

昔の人は、現代人とは比較することが出来ないほど質素な食事によく働き、スタミナ筋力は異常なほど強かつた。車もチャリンコもない江戸時代の人によく歩いた。一日10~20km歩くのは普通で、しかも早足だつたという。物流は大八車など人力。昔の人は、普通の生活や労働が、足腰や筋力を鍛えるトレーニングとなつていたのである。

体力鍛錬に関しては先人に見習うところが多々ある。

同会は12名の会員と団体役員として土地改良区、女性2名を含む12名の役員で構成されています。認定農地面積は191畝で矢川区(28.8%)の7倍もあります。東側を伊勢湾に面した海抜数メートルの広大な敷地に広がる水田は1枚が平均3反の広さがあり、水路の壁に繁殖するジャンボタニシの駆除に毎年苦労しているそうです。

同会には非農業者を含む男性

矢川環境保全会主催の先進地研修旅行が3月10日(土)に実施され、女性10名を含む31名が参加。伊勢市東大淀町の環境保全組織「東大淀を守る会」の活動を学びました。研修会場になつた2階建ての立派な町民会館では約20名の会員の皆さんが温かく迎えてくださり、午前10時から約1時間半、活動内容の報告と質疑応答が行われました。その後、バスによる周辺地域の現地視察もありました。

研修会

矢川環境保全会

「農業はまだ面白くない」という考えを基本に、自分たちの手

約30名による「草刈り隊」と女性40名による「EM部」が組織されています。「草刈り隊」は農道路肩や法面の草刈りの他、遊休地へのサツマイモの栽培などを実施。EM部は10年前から各家庭で出る米のとぎ汁とEM菌を混ぜた活性液を河川に「一斉放流」し、年1回水質調査をして効果を測定するなど河川浄化に取り組んでいます。

この他、EM部は水路や農道の法面に防草シートを張りシバザクラの植栽や葉ボタンの栽培などを行い景観形成にも力を入れています。また専門技能をもつた会員が、大型機械をリースして水路の泥上げや施設の補修も自主的に行つています。11月にはEM部が中心になり「産直市」を開催し、多くの来場者にお菓子や豚汁を実演販売しており、地域の活性化に結びつてい

でふるさとをしつかり守つていく姿に大いに感銘を受けました。

(レポーター・名張鳥獣害問題連絡会 会員 山田 泰次)



名張B群移動状況 平成30年3/21~平成30年4/20

指導員報告
B群は、4月中は宇陀市の滝谷花しょうぶ園を中心に、その付近で活動していると思われます。

4月中は目視での確認はできていません。B群についても地域での被害の声はありませんでした。

編集局より
B群エリアで、は今のところ大きな被害が発生してはいますが、被害が出始めると、栄養価の高い作物を得ることで栄養状態がよくなって出産率が増加し、個体数の急増

につながります。これらの変化は、意図せずに行っている人為的な餌が引き金となって作物被害が発生する前から起きていることが多いです。捨てた果物、くず野菜、法面の緑化植物、田んぼに落ちた糞やひこばえ、など餌として利用可能なものを除去して食べさせないようにすることが、被害の事前対策です。被害が発生していないときこそこの事前対策が効果があり重要なのです。

名張A群移動状況 平成30年3/21~平成30年4/20

編集局より
サルによる人身被害発生！。去る、4月10日登校途中の名張南中学校の生徒が被害に遭っています。ニホンザルは基本的に人間には近づかない動物です。サルによる被害は農作物の食害のほか、人馴れが進むことにより、家屋に侵入したり、人に飛び掛つたりといった人的被害が日本各地で発生。市街地に出没するようになった大きな要因の一つとして、意図せずゴミなどを放置することで、餌付け状態になっていることが考えられます。地域ぐるみ

でサルの餌となるようなものを無くすることが重要なことです。

遭遇した時の対処法
★ 近寄らない ★ 目を合わさない
★ 大声を出さない★ 走って逃げない
傷が軽症であったとしても傷口から雑菌が入り化膿する可能性もありますので、急いで病院へ行って手当をしてください。サル由来の感染症もありますので、病院では「サルに噛まれた」と告げることが大事です。

今月は指導員報告は割愛します。

